

# 英語科における学習困難点

丹下省吾・加藤 剛・高橋恵亮・倉田有邦

## 外国語学習の本質的困難点

その第一は、外国語環境を欠くことである。まことに当然のことながら、外国語は外国の言語であって自国のものではない。一個の人間がその母国語を習得するのにどれほど多くの訓練の場を得ていることか。問題を学校教育における母国語学習に限定してみても、教室以外の生活環境は依然として学習事項の drill の場でありまた学習材料の提供者でもある。母国語の知識・技能は環境との絶えざる交流によって深められ高められて行く。外国語の学習過程にはそのような環境がほとんどない。「聞く」、「話す」、「書く」力を養成する上に、あるいはその外国語の背景となる国民の風俗、習慣に親しむ上に、このことは根本的な障害となっている。

第二は、学習者がすでに母国語の言語体系を身につけているという事実である。最近では、両国語間の言語習慣の差異を科学的に比較究明して外国語指導の基盤たらしめる立場が強くなった。この方法によれば、母国語を知っているという不利は逆に有効に利用されることにもなるが、それにも拘わらず、学習者が母国語に習熟し日常それを使用していることは、学ばんとする外国語の音韻組織、語法その他のいろいろの言語現象に無意識のうちに作用して混乱をひき起こす。

第三として挙げたいことは、これはやや性質を異にするかもしれないが、中等教育における外国語学習の段階が急なことである。もちろん見方によっては中学、高校六ヶ年の期間は短いものではないし、数ヶ月の短時日で外国語を集中指導するという話も耳にしないことはない。しかし、中学校一年生に至って初めて外国語に接するという我が国の英語教育を思うとき、そしてその初学者が数年にして時には本国人にも難解な詩や論文に接している現状を見ると、我々はその著しい学力の向上にいささかの満足を感じると同時に、その過程がいかに困難なものであったかを、いかに多くの落伍者を出しているかを忘れるわけにはいかない。

上に挙げた困難点は、それに対して多少の補正手段を講ずる以外に早急の対策がないほどの本質的なものである。これに反し、我々が下の表にまとめた学習困難点は極めて具体的なものである。日々の指導にあたって我々が直面するものはそのように現実的であるが、その根柢には上述のような大きい問題が横たわっていることを見逃がしてはならない。

## 中学校・高等学校英語科における学習困難点の分析

以下の表は、本校英語科教員四名がそれぞれ数年ないし十年の指導体験から抽出した中学・高校英語の学習困難点を総合し、学習指導要領に従って整理したものである。この抽出にあたっては、日常の指導場面に見出される困難事項および諸テストの結果を資料とした。諸テストの中には、共同研究として本校英語科が行なって来た1957・8年度の「英語教育における発音指導」（本校紀要第3集・第4集）、および1959・60年度の「高校一年の学力よりみた中学英語学習上の問題点—語法について—」（本校紀要第5・6集）の資料を含んでいる。

この段階における困難点は、前述の本質的なものを基底に、設備、内容、学習態度など、いろいろ考えられるが、ここでは主として学習内容の面から困難点を抽出し、それに対して学習者がどのような原因でどのような抵抗あるいは誤りを生み出すかを考察した。

英語の学習に必要な過程について一言すれば、それは、理解→記憶→応用思考の反復であると考えられる。この過程は他の教科においても同じであると思うが、英語ではそれが中学一年より高校三年に至るまで一本に連なっている、という点で特色がある。換言すれば、中学校の初段階で学習する事項を理解し記憶していなければその上の段階へ進むことはできないのである。何らかの原因で初歩的な学習事項の理解に失敗すれば、高校程度の英語に習熟することは殆ど期待できない。高校英語の内容は、その一つ一つが中学英語のそれを足場に細分したものである。そのため、表にあらわれた困難点は、中学段階では個別的に、高校段階では総合的なものになっている。

中 学 校 の 部

| 区 分    | 事 項              | 困 難 点 の 内 容  | 考 察   |
|--------|------------------|--|---|
| 中 1    |                  |  |   |
| 2 (1)ア | 音声               | <p>1. 母音</p> <p>イ. 日本語音と著しく異なるために困難な音</p> <p>ロ. 日本語音と類似しているために困難な音</p> <p>2. 子音</p> <p>日本語音と異なるために困難な音</p> <p>3. アクセント</p> <p>単語のアクセントに対する感覚</p> <p>4. 綴り字と発音の関係</p> <p>両者が異なるための困難</p> <p>5. 抑揚</p> <p>文の種類による抑揚の相違</p> | <p>1.</p> <p>イ. [æ]この音にはなれていないために、発音に際して奇異な感じをうけ思いきって発音することを躊躇する。</p> <p>ロ. [i], [u], [ə:], [ou], [ei]日本語とほとんど区別が困難なため、間違っているという意識なしに正しいものとして通してしまふ。</p> <p>2. [ŋ] (語尾), [ŋ], [θ], [ð], [f], [v], [l], [r]平常なれていないために発音の際に特別な注意を怠りがちであるし、また意識していても奇異な感じをうけるために敢て発音してみる勇氣に欠ける場合もある。</p> <p>3. 日本語の場合と異なって英語では強いアクセントをもつが、その感覚になれていないことが大きな原因である。また日本語化された英語もあって、アクセントに対する正しい認識が不足している。</p> <p>4. 小学校でローマ字を学んできているために、すべてローマ字式に読もうとする傾向があるが、ローマ字音の知識にたよりすぎて英語特有の音の知識がつけにくい。</p> <p>5. 特に疑問詞のある疑問文と、それのない疑問文の文尾の抑揚の相違が困難である。これは文意を理解するのと、単語の発音に注意が向けられるため、その段階を越えれば、正しい抑揚にまで注意を向けることができるものと思われる。</p> |
| 2 (1)イ | There is (are)~. | <p>There is a book on the desk.</p> <p>The book is on the desk.</p> <p>上記二文の区別</p>   | <p>比較的容易な be 動詞の用法の中で、この構文の意味上の区別が難解で、説明の仕方も多大の工夫を要する。</p>  |
| 2 (1)イ | 疑問文              | <p>疑問詞を含む疑問文の語順</p>  | <p>疑問詞のない場合と比較して一層困難である。中学下級では英問英答の口頭練習が多いが、問を発するのは主として教師であるため、生徒が疑問文を作成練習する機会が少い。</p>  |
| 2 (1)エ | 名詞               | <p>数えられる名詞と数えられない名詞との明確な意識</p>   | <p>日本語ではさして問題にならないこの区別は、英文を扱うものが最も心すべき事柄の一つである。その名詞が単数か複数か、或は普通名詞か否か、これがなかなか生徒の注意を引かない。</p>   |
| 2 (1)エ | 冠詞               | <p>1. 普通名詞の単数形に冠詞 (あるいはその代用語) をつける</p> <p>2. 母音の前の不定冠詞は an である</p>   | <p>1. これは多くの生徒が高校上級になっても不注意で脱落させる事項である。やはり根本では日本語の習慣が大きく作用している。</p> <p>2. 名詞の前に冠詞を付けるところまでは気がついて、更に an になるところまで気附かない場合が多いが、これも不注意によるものであろう。</p>   |
| 2 (1)エ | 一般動詞             | <p>1. 主語が三人称、単数</p>  | <p>1. これも日本語では到底考えられないために起る間</p>  |

英語科における学習困難点

|        |                       |   |  |
|--------|-----------------------|---|--|
|        |                       | <p>で、時制が現在である場合、動詞の語尾に s 又は es をつける</p> <p>2. 疑問文、否定文の場合の do, does の使い方</p> <p>be 動詞を脱落せしめるあやまり</p> <p>1. アルファベット活字体<br/>2. 筆記体の導入</p> <p>問に対する正しい答え方</p> <p>発音と綴り字との関係<br/>両者が異なるための困難</p> | <p>違いで、疑問文、否定文の助動詞 do, does を使う文については誤りは比較的少いのに対し、普通の肯定文の場合になると、基本的な問題であるにもかかわらず誤る場合がかえって多い。これは do, does を使うものは練習する機会も多く、do, does というはっきりした区別があるために、正しい形がかなり明瞭に意識されるものと思われる。この s, es の脱落も上級まで続く。</p> <p>2. 上の項目と関連するが、この do, does を単独に考えれば、中学一年の語法としては、最大困難点の一つである。do, does という助動詞を使いながらそれに続く本動詞の原形の使い方を理解していないものがあるが、これは肯定文の場合と混同している為であろう。</p> <p>「進行形とは～ing である」と誤解しているものが多い。</p> <p>1. 2. 活字体も筆記体もいずれは習得してしまうものであるが、中学一年の一学期においては大きな負担である。</p> <p>疑問詞のある疑問文と、それのない疑問文に対する正しい答え方の区別が困難である。答える場合には常に yes か no で始めなければならないと誤った理解をする者が多い。また問の文の主語は常に you であり、答の文の主語は常に I であると考えて間違った表現をする場合が案外多いことも注意すべきである。</p> <p>先にあげた「綴り字と発音」の問題と同じく、ローマ字音の知識およびそれに加えて英語特有の音の知識が必要である。日本語式の発音をローマ字式に表わそうとするために誤りが多い。</p> |
| 中 2    |                       |   |  |
| 2 (1)エ | 過去形                   | 1. 動詞の活用  | 1. 規則動詞と不規則動詞の正確な記憶があいまいである。   |
| 2 (1)エ | 未来形                   | 2. 疑問文・否定文の場合の did の使い方<br>1. shall と will の使い方   | 2. 動詞の原形と共に使うということがなかなか身につかない。careless で間違えることも多い。<br>1. 主語の人称にしたがう意味の変化が平叙文と疑問文で異なり、更に米国式と英国式で異なるなど非常に複雑なため、その使い方に混乱をきたすことが多い。  |
| 2 (1)エ | 助動詞 (shall, will を除く) | 2. be going to その他の進行形による未来形の代用<br>1. 本動詞との区別   | 2. 1.の複雑さに加えて、未来形は左のようなものによって代用される場合が多いため、ますます生徒の頭を混乱させてしまう。<br>1. 助動詞はそれ自体では述語動詞とならず本動詞をとまって使われる、ということが理解しにくい。日本語流に考えて、I cannot English などという間違いが多い。  |
| 2 (1)エ | 現在完了形                 | 2. 本動詞との関係<br>1. 現在完了形の内容   | 2. 助動詞を使った場合、本動詞は必ず原形を使うということ。過去形を置いたり、また主語が三単現の場合 s をつけたりする誤りが多い。<br>1. Tense の概念が英語ほど正確でない日本語の語法をそのまま英語にあてはめるための誤りが多い。   |

|        |            |   |  |
|--------|------------|---|--|
|        |            | <p>イ. 結果をあらわす場合</p> <p>ロ. 動作の完了をあらわす場合</p> <p>ハ. 経験をあらわす場合</p> <p>ニ. 状態の継続をあらわす場合</p> <p>2. 現在完了を使う表現</p> <p>イ. 過去分詞の使用</p> <p>ロ. have 動詞の使用</p> <p>ハ. 語順</p>               | <p>イ. 過去の要素と現在の要素とが包含されているため、過去形または現在形との区別をつけることがむづかしい。「彼は…へ行きました」と「…へ行っております」とは同じ意味でありながら、前者は過去形と、後者は現在形と混同される。</p> <p>ロ. 過去形との区別が困難である。</p> <p>ハ. この場合は過去形を使ってもほぼ同じ意味になるが、このように過去形と明確な一線をひき難い場合もあることが、現在完了の概念をいっそう複雑にしている。</p> <p>ニ. イ. の場合と同様、日本語の表現に左右されて、過去形または現在形との区別が困難である。</p> <p>2. 1. で挙げた各事項に付随して、表現の場合には次のような問題点もある。</p> <p>イ. 規則動詞及び不規則動詞を正確かつ急速に覚えることができない。</p> <p>ロ. have と has の使いわけは、当然知っている筈だが、careless な間違いが多い。</p> <p>ハ. 平叙文の場合は余り問題にならぬが、疑問文の場合、主語と have 動詞の転倒に気づかぬことが多い。</p> |
| 2 (1)エ | 現在完了進行形    | 現在完了進行形の概念  | <p>現在完了の場合と同様の理由で、過去進行形または現在進行形との区別が困難である。</p> <p>また現在完了の「状態の継続」をあらわすものと、この現在完了進行形との差は動詞の性質によるため、使いわけがむづかしい。</p>   |
| 2 (1)エ | 受動態        | <p>1. 完了形と受動態の区別</p> <p>2. 態の転換</p> <p>イ. 主語と目的語の把握</p> <p>ロ. Be動詞を入れること</p> <p>ハ. 主語の数と Be 動詞との一致及びその時制</p> <p>ニ. 過去分詞の使用</p> <p>ホ. 人称代名詞の格の転換</p> <p>ヘ. 疑問詞を含む受動態の疑問文</p> | <p>1. have+p.p. と be+p.p. とが似ているための混同である。読解の場合はさほどでもないが、書いたり話したりする時によくまちがえる。</p> <p>2. 書かせてみると次のような誤りがめだつ。</p> <p>イ. 簡単な文の場合は容易だが、主語や目的語が長かったり、副詞句がついたりして複雑な場合にはこのことが困難となる。</p> <p>ロ. Be 動詞を脱落させることが多い。</p> <p>ハ. careless による場合が多い。</p> <p>ニ. 完了形の場合と同様、規則動詞と不規則動詞の変化を確実に覚えていることが必要である。</p> <p>ホ. We saw him. を He was seen by we. とする類で、基礎知識の不徹底による。</p> <p>ヘ. 疑問詞・be 動詞・主語・過去分詞の語順をまちがえる。使用される度合が比較的少ないためなおまちがい易い。</p>  |
| 2 (1)エ | 形容詞及び副詞の比較 | <p>1. 比較変化</p> <p>2. 比較級及び than の用法</p>   | <p>1. 比較級・最上級の規則変化・不規則変化ともに正しく覚えることがかなりの負担になる。特に二音節語の変化に迷うことが多い。<br/>(more careful : <u>pleasanter</u> etc.)</p> <p>2. 比較級を使えば必ず <u>than</u> を伴うと決めこんでいる者が多い。また <u>than</u> を前置詞だと思って次にくる代名詞の格をまちがえることは、かなり進んだ</p>   |

英語科における学習困難点

|              |                   |  |   |
|--------------|-------------------|--|---|
| 2(1)イ<br>別表2 | 文型及び構文            | <p>3. the+比較級の用法</p> <p>4. 最上級と定冠詞</p> <p>5. 最上級と前置詞 of</p> <p>6. as~as~ 及び not~so~as~の構文</p> <p>1. 主語+動詞+目的語+補語の文型</p> <p>2. 主語+動詞+目的語+to 不定詞の文型</p> <p>3. 主語+動詞+(目的語)+that-clause の文型</p> <p>4. 副詞節 (when, while, since etc.)</p> <p>5. so~that~の構文</p> <p>6. too~to~の構文</p> | <p>生徒にもしばしば見受けられる。(He is taller than me.)</p> <p>3. この形もよほど drill をしっかりやらないと生徒の頭には入りにくい。the は最上級につくもので比較級にはつかないと思いきや多い。</p> <p>4. 不注意からthe を落すことが多い。</p> <p>5. 最上級と共によく用いられる of を in などと間違えることがよくある。</p> <p>6. 形がやや複雑なため、例文をしっかり覚えておかないとなかなか使えない。また後の as を前置詞とまちがえることは2. の than の場合と同様である。</p> <p>1. 目的語と目的補語の関係及び区別が分らない。したがって語順をまちがえる。</p> <p>2. 前者より更にむつかしいらしい。日本語にあてはめて考えようとする、どうしても無理がでる。</p> <p>3. clause というものの概念が分らない。学力のおくれている者は、文を有機的に把握せず、わずかの単語の知識だけを頼りにして意味をみつけたそうとする傾向があるが、そういう者にとっては clause はまことに理解し難いものであろう。</p> <p>4. 3. の場合と同様、clause の概念をつかむことが困難である。</p> <p>5. 形が複雑なので、構造をよくのみこませた上で、くり返し練習する必要がある。総じて複文は生徒にとってかなりの困難を感じさせるようであり、理解させるだけにとどめておく方がいい場合もあろう。</p> <p>6. 構造をよく分らせておかないと、語の順序をよくまちがえる。</p> |
| 2(1)エ        | 不定詞<br>(to のつくもの) | <p>1. 形態</p> <p>2. 機能</p> <p>イ. 名詞用法</p> <p>ロ. 形容詞用法</p> <p>ハ. 副詞用法(目的・原因・結果)</p>  | <p>1. to のあと原形を使うべきところに原形以外の形を使用する者が多い。不注意でまちがう場合も多いが、不定詞のもつ機能・本質が分らないのでまちがう場合も多い。</p> <p>2. 次の各々の用法の区別が分らない者が多い。種類が多いのですぐには分らないということであろう。各々の用法が一応全部出てきたところに、重点的にとり上げて練習する必要がある。</p> <p>イ. want, try, begin 等の他動詞と共に覚えているうちはよいが、動名詞を習うようになると、その二つの区別に迷うようになる。</p> <p>ロ. 名詞、代名詞の後についてそれを修飾するという構造が分らない。また理屈は知っていても、文中でそれを見抜けないこともある。また前置詞が最後につくことがよくあるが、これはその理屈を理解するのに相当に骨の折れるところである。<br/>(a chair to sit on, a house to live in, etc.)</p> <p>ハ. この用法の中で目的をあらわすものは比較的わりよく、原因をあらわすものはややむつかしく、結果をあらわすものになると、使用される例の少いことと、日本語流の考え方では割り切れないことで、極めて理解困難となる。</p>  |
| 2(1)エ        | 分詞                | <p>1. 形態</p>   | <p>1. 進行形・完了形・受動態のところでは少しふれたが</p>   |

|       |         |  |   |
|-------|---------|--|---|
| 2(1)エ | 動名詞     | <p>イ. 現在分詞の綴り字</p> <p>ロ. 過去分詞の綴り字</p> <p>2. 機能(形容詞として用いられた場合)</p> <p>名詞用法の不定詞との共通点・相違点</p>       | <p>ここでは分詞全般の困難点をあげる。</p> <p>イ. 語尾の e をとって ing をつけること<br/>子音を重ねて ing をつける場合<br/>(writeing, writting, geting, etc.)</p> <p>ロ. 不規則動詞と規則動詞を確実に覚えること。後者に於いては現在分詞と同じような誤りがめだつ。<br/>(stoped, writen, studied, etc.)</p> <p>2. 名詞の前に置かれた場合は分り易いが、後に置かれた場合、修飾語の分詞を述語動詞とまちがえる。現在分詞の場合は進行形に、過去分詞の場合は過去形または受動態にまちがえる。“a man walking there” “a letter written in English” をそれぞれ「人が歩いている」「手紙が書かれた」と訳す誤りである。特に過去形と過去分詞形とが同形の場合に著しい。<br/>不定詞の名詞用法と共通して使われるものとそうでないものがあるので厄介である。<br/>前置詞の後に動詞を置く時には必ず動名詞にすること、これは不定詞と最も使い方の違うところである。</p> |
| 中 3   |         |  |   |
| 2(1)エ | 過去完了    | <p>1. 現在完了と過去完了のちがい</p> <p>2. 過去と過去完了の関係</p>   | <p>1. 時の基準をどこにおくかの概念がきわめて漠然としている。これは過去完了にも未来完了にもあてはまる問題点である。名詞の単複とともに、英文構成の中心となるのは動詞の時制の正しい表現であり、これらは形態を知らせると同時に、それぞれの時制の意味するところの区別をしっかりと理解させる必要がある。</p> <p>2. 過去における二つの動作について、一つの動作が他の動作に先立つことを示す為に用いる過去完了の理解が充分でない。これは二つの動作の間の時の関係の理解が不充分であると共に、所謂複文構造の理解の弱さに起因している。</p>  |
| 2(1)エ | 過去完了進行形 | <p>1. 過去進行形との区別</p> <p>2. 過去完了との区別</p>   | <p>1. 現在完了の場合と同様に日本語の語法に左右されて、過去進行形との区別が困難である。</p> <p>2. これも現在完了の場合と同じく、状態を表わす動詞と、動作を表わす動詞での両者の使いわけが極めて困難である。</p>   |
| 2(1)エ | 関係代名詞   | <p>1. 関係代名詞の概念</p> <p>イ. 二つの文を結合する際に関係代名詞は function word 即ち接続詞、と content word 即ち代名詞の両方の役目をする</p> | <p>1. 英語の関係代名詞にあたるものは日本語には存在しない。これが関係代名詞の学習を困難ならしめる最大の原因である。</p> <p>イ. 日本語にないものであるから、理解にはかなりの困難を伴う。学習初期において徹底的に理解しないものが少なからずある。</p>   |

英語科における学習困難点

|       |       |  |   |
|-------|-------|--|---|
|       |       | <p>ロ. 先行詞と関係節との修飾関係</p> <p>ハ. 格変化(特に所有格)</p> <p>2. 前置詞つきの関係代名詞</p> <p>3. 特殊な that の用法</p> <p>4. what の用法</p> <p>5. 関係代名詞の先行詞との数及び人称における一致</p> <p>6. 連続用法の訳し方</p> | <p>ロ.</p> <p>(1) 日本語においては修飾語が前置されるが、英語においては後置されることがある。(例、「机の上の本」 the book on the desk) このような型を中学一、二年の学習において充分理解していない。これが関係代名詞に導かれた節が形容詞節で、後から先行詞を修飾しているという関係の理解を困難ならしめている。</p> <p>(2) 制限用法では関係代名詞以下の形容詞節がどこまで続いているかということについての注意理解が不足している。</p> <p>ハ. 関係代名詞の、その導く節の中における機能の徹底的理解の不足による。</p> <p>2. 前置詞が関係代名詞以下の節において、どのような働きをしているかということの徹底的理解が不足している。</p> <p>3. 特殊な場合を覚えれば、あとは不注意をさければよい。</p> <p>4. 疑問詞と混同する。<br/>(例) I insist on paying what it has cost. (関)<br/>I insist on knowing what it has cost. (疑)</p> <p>5. 関係詞及び先行詞の理解の浅さ、不充分さが目立つ。</p> <p>6.<br/>イ. 関係節の修飾の強さに対して不注意である。<br/>(例)<br/>◦ There were very few passengers who escaped without serious injury.<br/>◦ There were very few passengers, who escaped without serious injury.</p> |
| 2(1)エ | 分詞構文  | <p>1. 意義</p> <p>2. 独立分詞構文の場合<br/>知覚・使役動詞の目的補語</p>  | <p>ロ. 接続詞がandだけでなく but, because, though, 等にも置き換え得ることの認識が不足している。</p> <p>1. 分詞構文の意義が分らないため、接続詞を共用する誤りが多い。</p> <p>2. 分詞の意味上の主語を脱落させる。<br/>構文がやや複雑なため覚えにくい。この種の構文は分解せずにこのまま一つの型として習熟させる必要があろう。</p>  |
| 2(1)イ | 原形不定詞 |  |   |
| 2(1)エ | 関係副詞  | <p>1. 関係副詞の概念</p> <p>イ. 先行詞と関係節との修飾関係</p> <p>2. 関係代名詞との区別</p>  | <p>1. 関係代名詞の場合と同じく関係副詞にあたるものが日本語に存在しないことが、関係副詞の学習を困難ならしめている。</p> <p>イ. 制限用法では関係副詞以下の形容詞節がどこまで続いているかということについての注意理解が不足している。</p> <p>2.<br/>イ. 制限用法において、関係代名詞がその導く節の中で代名詞としての役をするのに対し、関係副詞はその導く節の中で副詞として働く相違の理解が不十分である。<br/>ロ. 関係副詞＝前置詞＋関係代名詞という関係の理</p>  |





高等学校の部

| 区分                              | 事項           | 困難点の内容  | 考察   |
|---------------------------------|--------------|---|--|
| 2(1)<br>聞くこと、話すこと<br>イ          | 語の発音         | 個々の語の正しい発音<br><br>イ. 綴り字にまどわされない正しい発音<br><br>ロ. アクセントの正しい発音   | 個々の調音については、中学校入学時より徹底的に指導すべきであるが、高校段階に至っても不十分な者が多い。高校においては、さらに、新語が著しく増すので、その発音をおろそかにしやすい。<br>イ. 新語の急増により、学習者は辞書で発音を確認することを怠って、綴り字によって独断的な発音を憶え勝ちになる。これは「読むこと」とも関連するが、英語の綴り字と発音との不一致が生み出す、負担の大きい学習活動である。<br>(例) <u>through</u> , <u>cough</u> , <u>hiccough</u> , <u>though</u> , <u>thought</u> , <u>rough</u><br>ロ. 特に、一つの語幹から出た派生語間のアクセントの相違に気づかぬ場合が多い。類推のみでは不十分である。イ. の場合にもいえるが、耳からの機会が教室では少ない。 |
| イ                               | 抑揚, リズム      | 正しい抑揚, リズムによる文の発音   | 高校英語は視覚に頼る分野が多くなる。その結果、生きた文の流れ, “Language is primarily speech.” を忘れる。一つの文について考えても、その文の音調を決める要素は、文の表わそうとする思想感情, 強調の置きどころ, 文の構造などを総合したものであって、その複雑さは短時日の習得を極めて困難にしている。  |
| ウ<br>(キ)                        | 発表           | 考えたことの英語による表現   | 学習者の性格, 文法に対する過剰意識, 語彙の不足, 語の選択力の不足, その他英語学力全般に関係のある、しかも十分な練習の機会がなければ解決されない困難事項である。  |
| 2(2)<br>読むこと<br>ア<br>(ウ)<br>(エ) | 語, 連語<br>慣用句 | 1. 意味の理解<br>イ. 同一語句の異なった意味<br>ロ. 類意語句との関係<br><br>ハ. 類音語句との区別<br><br>2. 語彙の保持, 増大<br>イ. 記憶<br><br>ロ. 派生語への配慮 | 1.<br>イ. 語句の持つ意味を文脈の中で理解する, という習慣がつけにくい。<br>ロ. 似ていながら微妙な意味の相違を持つ語句が多い。こまかい注意を払わないと混同する。<br>ハ. 音あるいは綴り字が類似しているために二つの語句を混同することが多い。不正確な記憶による。<br>2.<br>イ. 復習より予習に重点が置かれ, 反復記憶の努力を怠る。文脈の中でなく, 無関連に記憶しようとする。<br>ロ. 接頭・接尾語に対する関心がうすく, 記憶に徒勞が多い。  |
| (イ)                             | 構文           | 1. 単文構造の把握<br>イ. 文の主要素と修飾要素との区別<br><br>ロ. 語句のかかり  | 1.<br>イ. 語句の用法の理解が不十分である。たとえば, 一つの語の品詞の誤認はその文の構造を一変する。<br>ロ. 語句の用法を正しく知って判断しないと混乱する。   |

|                                   |   |    |   |  |  |
|-----------------------------------|---|----|---|--|--|
| 2 (3)<br>書(2)ア<br>く(オ)<br>こと<br>a | ウ | 内容 | <p>ハ. 語順の持つ意味</p> <p>2. 節と節との関係の把握</p> <p>3. 特殊構文の認識<br/>イ. 省略, 倒置<br/>ロ. 挿入</p> <p>1. 大意の把握<br/>2. 常識による判断<br/>3. 日本語への再表現</p> | <p>ハ. 語彙的な意味のみを見て, 構造的な意味を考えない。読解の困難点の根本的なものである。</p> <p>2. 単文構造の不完全な把握, 接続語の用法の不十分な理解による。</p> <p>3.<br/>イ. 標準構文の理解欠如により, 特殊構文たる認識ができない。<br/>ロ. 標準構文の知識とともに, 句読点, 特にコンマの持つ意味に気づかぬことが多い。</p> <p>1. 語句の意味にとらわれて, 全体を見ない。<br/>2. 日本語に置きかえただけで足れりとする気持がたよく, その日本文の表わすものの非論理性に気づかない。<br/>3. 最も一般的に行なわれるものであるが, 日本語の選択, 構成力を高度に要求するものである。</p> |  |
|                                   |   | 名詞 | <p>1. 単数, 複数の使い分け</p> <p>2. 名詞の分類</p> <p>3. 二重所有格の使用</p>  | <p>1. 日本語習慣の影響が誤りの原因である。作文の際にこれが一貫しない者, 注意を向けない者が極めて多い。</p> <p>2. 現行文法の五種類は多すぎて, 無駄な困難を招く。</p> <p>3. どのような場合に二重所有格を用いるかが理解しにくい。また, 理解はしていてもそれを用いることを忘れて表現する。</p>   |  |
|                                   |   | b  | 冠詞  | <p>1. 冠詞脱落の防止</p> <p>2. 不定冠詞・定冠詞を使い分ける基準となる修飾語句の限定の強さの判断</p> <p>3. 数えられない名詞の冠詞の有無の判断</p>   | <p>1. 日本語の影響の大なるものの一つで, 少しうっかりすると陥る, 作文の基本的な誤りである。</p> <p>2. 冠詞使用の諸規則は複雑ではあるが, 必ずしも理解できないものではない。しかし, 一般の規則的な用法をこえて, それぞれの場合の意味の相違によって, すなわち, ある名詞を修飾する形容語句の限定の強さのちがいによって定冠詞を使うか不定冠詞を使うかが決定されるような場合は, その感覚の会得が極めて困難である。</p> <p>3. 根本は2.と同じ種類の困難であるが, 特に抽象内容を表わす名詞は限定の種類により冠詞が出没して, 作文には困難である。</p> |
|                                   |   | c  | 代名詞   | <p>1. 不定代名詞の用法</p> <p>2. 関係代名詞<br/>イ. what と名詞節を導く接続詞 thatとの区別<br/>ロ. 前置詞つき関係代名詞の使用</p>  | <p>1. 種類は少ないが, その意味するものが漠然としている上に, 類似のものが多く, また単数にも複数にも使われて, 混乱をひき起こしやすい。</p> <p>2.<br/>イ. 主として, 日本語に訳した場合の訳語の類似から区別困難を生ずる。関係詞と接続詞との機能の相違点が理解できない。<br/>ロ. 基本は中学段階で習得しているものであるが, 依然としてこの構造の理解できない者や不注意で前置詞を脱落せしめる者が多い。</p>  |
|                                   |   | e  | 動詞  | <p>1. 適切な時制の使用</p> <p>2. 仮定法の理解<br/>イ. 直説法との意味・形</p>   | <p>1. 時制の表わす意味がよくのみこめていないため, 好い加減な動詞の形を使って表現しようとする。作文の基本的な誤りの一つである。</p> <p>2.<br/>イ. ロ. 特に形態面のみ注意到奪われて, どうい</p>  |

英語科における学習困難点

|   |        |                                       |   |
|---|--------|---------------------------------------|---|
|   |        | 態上の区別<br>ロ. 仮定法の各時制の区別<br>3. 準動詞の使い分け | う意味を表わすときにどの形を使うか、ということに意を用いない。<br>3. 不定詞、分詞、動名詞それぞれ特殊性があり、しかも共通の性質も持っている。また慣用的な結びつきも少なくない。   |
| f | 助動詞    | 適切な意味を持った助動詞の使用                       | 種類は少ないが一つの語が幾通りもの意味を持ち、また類意の助動詞も多いので、その微妙な意味のちがいに応じて適切な語を使うことが困難である。  |
| g | 副詞     | 位置                                    | 副詞の種類によってその占める位置が幾種にも分れ、さらに口調がそれを左右もするので、正しい位置が決めにくい。また、副詞の修飾語機能に注意を払わず、被修飾語と無関係な位置に置く誤りも作文ではよく見られる。  |
| h | 前置詞    | 類意前置詞の使い分け                            | 前置詞には意味が互いに類似したものが多い。また他の語との結びつきが変わると一つの前置詞がいろいろな意味を持つ。考えようによっては、前置詞というのはそれぞれの個有の意味を持っていない、ともいえる。前置詞を扱うには、こうように他の語との関連を知らなければならない。  |
| j | 一致     | 主語と述語動詞との一致                           | 約束を理解することは至難ではないが、実際に表現するときに、特に自由作文のような長文では、この一致の約束を無意識に破ってしまう。作文の基本的な誤りの一つである。   |
| イ | 文の組み立て | 1. 文の転換<br>2. 文の各要素の適切な配置             | 1. 語法の知識の総合的な力が要求される。特に、品詞の転換に必要な語形変化、慣用句、接続語、動詞の時制、前置詞、句・節などについての知識が必要であり、高校文法作文の困難な問題である。<br>2. 語形、語の結びつき、文の連絡など、標準の文が構成されても、意味の強弱、口調、均整などの点から見て有効な文を作り上げることは容易ではない。規範となる英文を観察して練習することが大切であるが、その機会が少ない。 |